HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	4-6歳幼児の社会的相互交渉についての研究
Author(s)	氏家, 達夫
Citation	北海道大學教育學部紀要, 40, 89-103
Issue Date	1982-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29255
Type	departmental bulletin paper
File Information	40_P89-103.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

4－6歳幼児の社会的相互交渉についての研究

氏家達夫

A study on social interaction in 4- to 6-year-old children

Tatsuo Ujiie

問題

就学前幼児の社会的相互交渉の発達についてのParten（Parten & Newhall 1943）の研究は良く知られている。Partenは，42名の2～4歳児の自由遊び場面での社会的相互交渉を分類するために次のような6つのカテゴリを開発した。すなわち，「何もしていない行動（Unoccupied behavior）」「1人遊び（Solitary play）」「傍観者的行動（Onlooker behavior）」「平行遊び（Parallel play）」「連合遊び（Associative play）「協同あるいは組織的遊び（Cooperative or organized supplementary play）の6つである。そして，Partenの資料では年齢による各カテゴリの出現率の変化に一定の規則性が認められる。何もしない行動は3歳過ぎの幼児では見られない。1人遊びは2～3歳児で最も多く見られ，それ以降漸減して行く。平行遊びも2～3歳児で最も多いが，それ以降の年齢群でもかなり多く見られる。連合遊び，協同遊びは，いずれも年齢とともに増加して行く。これらの結果からPartenは，上記の6カテゴリが社会的相互交渉の発達の程度を直線的に表わすものと考えた。そして，各カテゴリに上記の順序でそれぞれ－3，－2，－1，1，2，3という重みづけを行なって各個人の社会的相互交渉得点を算出して，それが生活年齢と有意に正相関（r＝.67）することを見い出した。この相関は，各カテゴリに対するPartenの重みづけが妥当であることを示すものと解釈された。Partenのこのような見解は長い間広く受け入れられ，異なったサンプルによる再検討は最近　で行なわれていなかった。しかし，最近の研究は，Partenの見解と基本的に異なる結論を出している。

Moore，Everton & Brophy（1974）は，1人遊びの内容を分析した結果，1人遊びの大半がブロック遊びや工作などの目標志向的活動や読書，パズルなどの教育的活動であることを見い出した。この結果からMooreらは，1人遊びがPartenの仮定するように社会的発達の未熟な不適応的活動ではないと結論した。この結論は，Rubin，Maioni & Hornung（1976）やSmith（1978）の研究でも支持された。Rubin et al（1976）は，3～4歳児を対象としてPartenのカテゴリをSmilansky（1968）のカテゴリで再分類して，3～4歳児では平行遊びこそが社会的発達の未熟な段階の表われであり，1人遊びは，1人で遊んでいたいというその子どもの意図に基づいた適応的な活動であると結論した。Smith（1978）は，9か月間にわたって6回の観察を行ない，各観察セッションで最も多く見られたカテゴリの変化のパターンを分析して，3歳児の1部と4歳児では，1人で遊ぶか集団で遊ぶかは子どもの選択の問題（オプション）

であり，1人遊びが集団的活動と比べてレベルの低い活動ではないとした。そして，平行遊びは2～3歳児に最も典型的な活動であると結論した。

このように，Partenの見解と最近の研究の結論との基本的な相違点はおよそ次の2点に集約することができる。

(1) 1人遊びは，Parten (Parten & Newhall 1943) の仮定したように傍観者的行動や平行遊びよりも低いレベルの活動ではなく，1種の適応的な課題志向的活動である。

(2) しかも，1人で遊ぶか集団で遊ぶかは子どもの意思で決まるのであり，能力で決まるのではない（これを1人遊びオプション説と呼んでおく）。

しかし，この2つの見解についてはまだ多くの問題が残されている。というのは，まず第1点については，対象とする年齢が3～4歳に限られていること，又，そこでは主に観察資料にだけ基づいて推論が行なわれていることなどが考えられる。第2の点についても，たとえもし本当に1人遊びがオプションであるとしても，Rubin et al (1976) やSmith (1978) の結果から1人遊びと集団的活動との関係やその安定性などは明らかにされない。そこで，これらの問題についてもう少し詳しく検討してみる。

まず始めに，1人遊びがParten (Parten & Newhall 1943) の仮定したような最もレベルの低い活動であるか，それともMoore et al (1974) やRubin et al (1976)，Smith (1978) の主張するような課題志向的活動であるかを決定するために有効な方法として，それと認知能力との関係を検討することが考えられる。すなわち，もし1人遊びがMooreらの主張するような活動であるとすれば，それは認知能力と正に相関することが予想される。一方，Partenの主張するような活動であるとすれば，それはむしろ負に相関すると予想される。ところが結果は一致していない。Parten (Parten & Newhall 1943) は，社会的相互交渉とIQとの相関を各カテゴリ毎に算出した。その結果，1人遊びが負 (−.20) に，平行遊びが正 (+.69) にそれぞれ相関することが示された。この結果は，1人遊びの方が平行遊びよりも発達的レベルが低いというPartenの見解を支持するものである。それに対してRubin (Rubin, Maioni & Hornung 1976による) は，平行遊びが役割取得能力と負に相関し，1人遊びは有意な相関を示さないとしている。又，Jennings (1975) は，1人で遊ぶ程度が物理的事象についての知識と正に相関することを見い出した。しかし，対人的活動の多さは社会的事象についての知識と有意な相関を示さなかった。この2つの研究結果は，最近の研究から導き出された見解を支持するものと解釈される。しかし，Rubinの結果では1人遊びについて何も明らかではないし，Jenningsでも，1人遊びそれ自体の多さが直接問題となっている訳ではない。従って，この方法ではまだ，上記の2つの見解のどちらがより妥当であるかを明確にするまでに至っていない。本研究では，社会的認知やより一般的な認知の能力と社会的相互交渉との関係を検討してみる。

又，従来の研究では，2～4歳台の幼児を対象としている。そこで，より年齢の高い子どもを対象として各カテゴリの増減のパターンを検討することで，問題となっている1人遊びの性質を推論することが可能だと思われる。すなわち，もし1人遊びが最も低レベルの活動であれば，5～6歳児ではその頻度がかなり減少するであろう。一方，1人遊びが既に4歳でオプションだとすれば，それは5～6歳児でもそれ程減少することはないであろう。この予想は，イスラエルの5～7歳児を対象としたHertz-Lazarowitz, Feitelson, Zahavi & Hartup (1981) の研究で検証されている。しかし，彼らも指摘するように，5歳以降の子どもを対象とした観察資料は彼らの結果の他に見られない。従って，彼らの資料がどの程度一般的なもの

であるか，異なったサンプルで検討してみる必要があろう。

Rubin et al (1976) やSmith (1978) は1人遊びオプション説を提唱しているが，1人遊びと集団的活動とはどのように関係するのだろうか。この問題については2つの異なるモデルが考えられる。その1つは，この2つの活動が正反対の性質を持つというものである(Emmerich 1964; 1977; Kohn & Rosman 1972; Schaefer 1971)。Emmerich (1964) は幼児の1側面を記述する尺度として対人的志向性(Interpersonal orientation)－非対人的志向性(Impersonal orientation) の次元を用いた。Schaefer (1971) の次元は外向性 (Extraversion) －内向性 (Introversion) であり，Kohn & Rosman (1972) では興味・参与 (Interest-Participation) －無関心・引込み (Apathy-Withdrawal) であり，いずれも他児と関わりを持つ－1人で活動する，といった2極構造として想定されている。

それに対して最近のRoper & Hinde (1978) の結果では，1人遊びと集団的活動は異なった因子に負荷し，両者に有意な関係は見られなかった。この結果は，上述した2極1次元モデルと異なり，この2つの活動が全く異質なものであることを示唆している。

又，1人遊びがオプションであるとした場合，1人遊びを選ぶか集団的活動を選ぶか何によって決められるのだろうか。それは子どもの安定した行動スタイルなのだろうか，それとも状況変数に依存して変動するものなのだろうか。Emmerich, Kohn & Rosman, Schaefer, そしてRoper & Hindeはいずれもこの個人差は長期的に安定したものだと想定しているし，実際安定性を示す結果を報告している。しかし，Smith (1978) の縦断的資料では，観察セッション間でドミナントな活動が1人遊びから集団的活動へ，あるいは逆の方向に変化するのが見られる。そして彼は，このような変動を彼の1人遊びオプション説の1つの根拠にさえしているのである。

このように，1人遊びの発達的意味やオプション説を巡っていくつか対立的結果が示されている。本研究は，このような対立を根本的に解決しようという性質のものではない。ただし，従来の研究ではそれぞれ別々に扱われていた問題を同時に検討することで，問題解決の糸口を探り出そうという試みである。具体的には，4～6歳児を対象として自由遊び場面の観察と社会的認知を含めた認知能力テストとを行ない，次の4点を検討してみる。

(1) 4～6歳児ではどのような社会的相互交渉が見られるだろうか。Partenと類似のカテゴリを用いて検討する。

(2) そこで観察された行動と認知能力とはどのように関係するか。

(3) そこで観察された行動は相互にどのように関係するか。

(4) 観察とテストをおよそ4か月おいて2度実施し，(1)～(3)の結果の安定性を検討する。

方　法

被験児

被験児は，札幌市内の公立保育園に通園している4～6歳児60名（1回目の平均月齢67.6か月，55—78か月，2回目の平均月齢71.3か月，59—82か月）であった。このうち男児4名は退園と病気のために2度目の観察とテストを受けていない。又，女児1名がやはり病気のため2度目のテストを受けていない。従って，観察，テストとも2度受けた被験児は55名であった。被験児の年齢構成，性の比率，家族変数はTable 1に示す通りである。

Table 1 被験児の年齢構成と家族変数

年齢	No. Ss	学歴	No. Ss		家族数	No. Ss	出生順位	No. Ss	同胞数	No. Ss
			父親	母親						
4 歳	14 (F10, M 4)	中学	10	15	2 人	7	1人子	19	1 人	19
5 歳	25 (F10, M15)	高校	22	32	3 人	2	長子	6	2 人	22
6 歳	21 (F10, M11)	短大・各種	3	7	4 人	20	中間子	4	3 人	11
合計	60 (F30, M30)	大学	13	3	5 人	13	末子	31	4 人	2
		不明	1	1	6 人	4			5 人	0
		不在	11	2	7人以上	4			6 人	1

観察

各被験児は，保育園の自由遊び時間の活動を10分間ずつ5回，計50分間観察された。観察の行なわれた時間帯は，午前9時から10時半までと午後4時から5時までの2つで，朝遅く登園したり午後早く降園する子どもを除いて，午前3回，午後2回の観察を行なった。各観察セッションは20秒を1単位とした連続的な30の単位からなっている。観察者は，小型テープレコーダーに録音されたタイマーの発振音をイヤーホーンで聞きながら5秒間子どもの活動を見て15秒間でそれを記録した。記録はチェックリストを用いて行なわれた。各行動カテゴリの出現頻度は150である。

チェックリストに記載されている行動カテゴリは次の通りである：何もしていない行動，傍観者行動，平行遊び，保母との交渉，1人遊び，他児との社会的相互交渉。他児との社会的相互交渉は更に次のような下位カテゴリからなる：集団遊び，役割遊び，対話，他見に話しかける，他児から話しかけられる，他児を攻撃する，他児から攻撃される，けんか，向社会的行動，自己主張，主導的行動，各カテゴリの簡単な定義は以下の通りである。何もしていない行動：実質的な活動が見られない場合。傍観者的行動：自分では何もしていないが，他児の活動を眺めている場合。平行遊び：他児の近くで他児と同じような活動をしているのだが実質的な相互交渉は見られない場合。保母との交渉：保母とだけ相互交渉を持つ場合。1人遊び：他児と何の関係もなしに1人で活動している場合。他児との相互交渉：次の11のカテゴリが少なくとも1つ以上見られる場合。集団遊び：他児と1緒に遊ぶ。役割遊び：役割分担の明確な集団活動。対話：言語的やりとり。他児に話しかける：対象児から他児への言語的働らきかけ。他児から話しかけられる：他児から対象児への言語的働らきかけ。他児を攻撃する：他児に対する身体的言語的攻撃，意地悪。他児から攻撃される：他児にいじめられる。けんか：身体的言語的争い。遊びの中での争いは含まない。向社会的行動：他児に対する援助，同情，共有。自己主張：他児の侵害に対する抗議と自分の意思の主張。主導的行動：他児に対する命令，禁止，提案。

観察の信頼性は2人の独立な観察者間の一致率で検討されたが，一致率は.82～1.00であり，平均一致率は.90であった。

テスト

認知的能力を測定するために次の7種のテストを行なった。WPPSIの言葉の理解テスト，菱形模写テスト，人物画完成テスト，数の保存テスト，かくれんぼテスト，視点取得テスト，絵の説明テスト。かくれんぼテスト，視点取得テストは役割取得能力を，絵の説明テストは共感能力を測るテストである。各テストの実施要領や得点化の方法はUjiie & Furuta (1981)に詳しいので，ここでは省略する。

テストは，保育園の教室と休憩室とで個別的に実施された。所要時間はおよそ30分～40分であった。

時期

観察とテストはそれぞれ2度実施されたが，最初は1980年10～11月（Time 1），2度目は1981年2～3月（Time 2）に実施された。各時期ともに先にテストを行ない，テスト完了後観察を行なった。

結　果

4－6歳児における社会的相互交渉パターン

本研究では2度の行動観察を行なった。Time 1における各行動カテゴリの出現頻度はTable 2に，Time 2の出現頻度はTable 3に示される。全被験児について見ると，何もしていない行動は全記録の6.07%（Time 1）と6.97%（Time 2），傍観者的行動は8.85%と8.44%，1人遊びは18.07%と17.83%，平行遊びは11.73%と22.62%，保母との交渉は8.33%と6.93%，そして他児との社会的相互交渉は49.41%と42.03%であった。この結果を従来の資料と比較したのがTable 4である。従来の2～4歳児を対象とした研究の結果と比べてみると，平行遊びが少なく，他児との社会的相互交渉が多くなっていることが分る。ただし，Hertz-Lazarowitz et al (1981) の5，7歳児の資料と比べると平行遊びは本研究の方が多く，他児との社会的相互交渉は少ない。1人遊びは，従来の資料とほぼ同じ程度観察されている。

社会的相互交渉の年齢差と性差

本研究では4，5，6歳の男女を被験児としている。そこで，本研究の結果に年齢差と性差が見られるかどうかを3×2の2要因分散分析を用いて検討する。分散分析の結果，年齢の主効果が認められたのは，Time 1では他児との社会的相互交渉だけであった（$F=4.18$, df 2,54, $P<0.03$）。Fig. 1に示されるように，他児との社会的相互交渉は年齢とともに増加して行く。これを下位カテゴリでみると，役割遊び（$F=3.17$, $P<0.06$），集団遊び（$F=5.08$, $P<0.01$）が年齢とともに増加して行く。又，傾向として，1人遊びは年齢とともに減少して行く（$F=2.39$, $P<0.11$）。一方Time 2では，他児との社会的相互交渉はTime 1と同様に年齢とともに増加しているが，統計的に意味のある増加ではない。1人遊びは，やはりTime 1と同様に年齢とともに減少する傾向が認められる（$F=2.46$, $P<0.10$）。保母との交渉にも，年齢の主効果が認められる（$F=3.00$, $P<0.06$）が，これはFig. 2に示されるように5歳児だけが他の2群よりも少ないことによる。平行遊びは，Time 1，2いずれにおいても年齢差は見られない。

次に，性の主効果はTime 1では他児との社会的相互交渉で認められる（$F=4.29$, df 1,54, $P<0.05$）。Fig. 1に示されるように，他児との社会的相互交渉は男児の方が多い。下位カテゴリでは，他児を攻撃する（$F=8.26$, $P<0.01$），集団遊び（$F=3.15$, $P<0.10$），向社会的行動（$F=6.04$, $P<0.02$）で性の主効果が見られる。向社会的行動は女児で多く，残りの2つは男児で多く観察される。一方Time 2では，保母との交渉で性差の傾向が見られる（$F=2.99$, $P<0.10$）。他児との社会的相互交渉はTime 1と同様に男児の方が多いが，統計的に有意な差ではない。ただし，他児を攻撃するでは性の主効果が見られ（$F=7.13$, $P<0.01$），男児の方が攻撃的である。

Table 2　Time 1 における各行動カテゴリの出現頻度の平均値と SD

	全年齢群			4歳児			5歳児			6歳児		
	全被験児	女児	男児	男女込み	女児	男児	男女込み	女児	男児	男女込み	女児	男児
何もしていない行動	9.10 (7.18)	9.77 (7.90)	8.43 (6.44)	8.64 (6.85)	8.80 (7.25)	8.25 (6.70)	9.28 (7.14)	12.10 (8.94)	7.40 (5.15)	9.19 (7.76)	8.40 (7.71)	9.91 (8.11)
傍観者的行動	13.17 (10.24)	15.07 (11.53)	11.47 (8.58)	17.57 (13.70)	20.70 (14.82)	9.75 (6.34)	12.84 (8.66)	15.40 (9.54)	11.13 (7.90)	10.91 (8.83)	9.10 (6.52)	12.55 (10.56)
1人遊び	27.10 (19.74)	31.03 (22.05)	22.87 (16.41)	34.07 (23.83)	32.80 (25.68)	37.25 (21.52)	29.36 (17.56)	39.90 (19.89)	22.33 (11.92)	19.76 (17.70)	21.30 (17.78)	18.36 (18.38)
保母との交渉	12.50 (11.84)	13.30 (11.42)	11.70 (12.39)	12.86 (10.80)	12.10 (8.67)	14.75 (16.52)	13.24 (13.93)	15.50 (13.56)	11.73 (14.43)	11.38 (10.15)	12.30 (12.37)	10.55 (8.17)
平行遊び	17.60 (12.35)	18.60 (12.14)	16.60 (12.69)	20.14 (12.91)	21.70 (14.04)	16.25 (10.15)	18.32 (12.02)	17.50 (11.07)	18.87 (12.96)	15.05 (12.50)	16.60 (11.77)	13.64 (13.54)
他児との社会的相互交渉	74.12 (27.96)	66.10 (29.23)	82.13 (24.56)	59.79 (25.46)	57.90 (29.67)	64.50 (11.24)	71.40 (23.83)	55.00 (20.59)	82.33 (19.51)	86.91 (29.65)	85.40 (28.71)	88.27 (31.82)
他児を攻撃する	2.62 (3.36)	1.30 (1.99)	3.93 (3.92)	0.71 (1.07)	0.60 (0.97)	1.00 (1.41)	3.52 (4.45)	0.70 (1.06)	5.40 (4.87)	2.81 (2.27)	2.60 (2.80)	3.00 (1.79)
他児から攻撃される	0.93 (1.71)	0.67 (1.30)	1.20 (1.79)	1.21 (2.16)	1.40 (2.50)	0.75 (0.96)	0.68 (1.38)	0.20 (0.42)	1.00 (1.69)	1.05 (1.77)	0.40 (0.97)	1.64 (2.16)
けんか	0.90 (1.89)	0.60 (1.30)	1.20 (2.33)	0.36 (0.75)	0.40 (0.84)	0.25 (0.50)	1.12 (2.35)	0.50 (0.97)	1.53 (2.90)	1.00 (1.82)	0.90 (1.91)	1.09 (1.81)
役割遊び	12.30 (12.58)	13.47 (14.23)	11.13 (10.81)	15.93 (15.24)	17.90 (16.76)	11.00 (10.89)	7.40 (8.53)	7.20 (7.08)	7.53 (9.62)	15.71 (13.31)	15.30 (15.88)	16.09 (11.28)
集団遊び	43.57 (27.85)	36.73 (23.70)	50.40 (30.33)	30.71 (15.35)	29.10 (16.67)	34.75 (12.53)	38.48 (20.81)	27.80 (14.36)	45.60 (21.76)	58.19 (35.26)	53.30 (29.46)	62.64 (40.75)
他児に話しかける	14.85 (7.96)	14.17 (8.97)	15.53 (6.89)	13.00 (7.97)	12.40 (8.62)	14.50 (6.95)	14.48 (7.93)	10.90 (8.10)	16.87 (7.09)	16.52 (8.04)	19.20 (8.70)	14.09 (6.88)
他児から話しかけられる	5.10 (3.82)	5.03 (4.37)	5.17 (3.26)	5.50 (5.81)	6.00 (6.34)	4.25 (4.79)	5.24 (3.11)	4.90 (3.21)	5.47 (3.14)	4.67 (3.02)	4.20 (3.01)	5.09 (3.11)
対話	21.20 (11.98)	18.20 (13.24)	24.20 (9.90)	14.93 (9.29)	13.10 (9.71)	19.50 (7.23)	23.68 (12.43)	19.80 (14.64)	26.27 (10.46)	22.43 (12.04)	21.70 (14.52)	23.09 (9.95)
向社会的行動	2.63 (4.02)	3.83 (4.81)	1.43 (2.60)	2.36 (2.85)	3.20 (2.97)	0.25 (0.50)	1.76 (1.72)	2.40 (1.58)	1.33 (1.72)	3.86 (6.02)	5.90 (7.46)	2.00 (3.80)
主導的行動	2.90 (3.22)	2.23 (3.06)	3.57 (3.30)	2.14 (3.18)	1.10 (1.45)	4.75 (4.99)	2.48 (3.02)	1.60 (2.91)	3.07 (3.04)	3.91 (3.39)	4.00 (3.77)	3.82 (3.19)
自己主張	2.65 (3.28)	2.70 (4.02)	2.60 (2.39)	2.50 (2.77)	1.60 (2.01)	4.75 (3.40)	2.60 (3.73)	2.70 (5.48)	2.53 (2.13)	2.81 (3.16)	3.80 (3.91)	1.91 (2.07)

Table 3 Time 2における各行動カテゴリの出現頻度の平均値とSD

	全年齢群			4歳児			5歳児			6歳児		
	全被験児	女児	男児	男女込み	女児	男児	男女込み	女児	男児	男女込み	女児	男児
何もしていない行動	10.45 (8.77)	10.60 (8.76)	10.27 (8.97)	11.57 (10.04)	8.60 (6.80)	19.00 (13.95)	9.87 (7.21)	13.10 (9.24)	7.39 (4.00)	10.32 (9.87)	10.10 (10.18)	10.56 (10.13)
傍観者的行動	12.66 (10.94)	14.47 (12.68)	10.58 (8.25)	13.71 (14.11)	16.70 (15.71)	6.25 (4.35)	13.74 (10.45)	16.90 (13.17)	11.31 (7.44)	10.58 (9.01)	9.80 (7.87)	11.44 (10.55)
1人遊び	26.75 (18.00)	25.43 (16.90)	28.27 (19.42)	34.86 (20.25)	33.90 (23.75)	37.25 (8.62)	25.87 (19.85)	21.50 (11.55)	29.23 (24.37)	21.84 (11.64)	20.90 (10.19)	22.89 (13.62)
保母との交渉	10.39 (7.99)	12.33 (8.28)	8.15 (7.16)	12.29 (9.14)	15.50 (8.68)	4.25 (3.86)	7.17 (4.87)	8.20 (4.24)	6.39 (5.33)	12.90 (9.13)	13.30 (9.82)	12.44 (8.86)
平行遊び	33.93 (18.47)	36.33 (21.29)	31.15 (14.49)	31.79 (18.57)	31.70 (21.16)	32.00 (12.25)	37.44 (18.92)	43.70 (22.57)	32.62 (14.70)	31.26 (18.14)	33.60 (20.25)	28.67 (16.28)
他児との社会的相互交渉	63.04 (24.77)	58.07 (23.70)	68.13 (24.56)	52.00 (22.73)	50.50 (25.09)	55.75 (17.99)	64.70 (23.51)	54.40 (21.14)	72.62 (22.85)	69.16 (26.22)	69.30 (22.69)	69.00 (31.11)
他児を攻撃する	1.59 (2.54)	0.73 (1.20)	2.58 (3.26)	1.21 (2.19)	0.60 (1.08)	2.75 (3.59)	2.22 (3.07)	0.80 (1.55)	3.31 (3.55)	1.11 (1.97)	0.80 (1.03)	1.44 (2.70)
他児から攻撃される	0.36 (0.88)	0.40 (0.77)	0.31 (1.01)	0.21 (0.43)	0.20 (0.42)	0.25 (0.50)	0.39 (0.96)	0.30 (0.68)	0.46 (1.39)	0.42 (0.84)	0.70 (1.06)	0.11 (0.33)
けんか	0.87 (1.40)	0.93 (1.68)	0.80 (1.00)	1.36 (2.27)	1.50 (2.64)	1.00 (1.16)	0.82 (0.96)	0.40 (0.52)	1.17 (1.12)	0.58 (0.90)	0.90 (1.10)	0.22 (0.44)
役割遊び	8.32 (12.78)	8.03 (11.21)	8.65 (14.60)	4.50 (9.21)	6.20 (10.55)	0.25 (0.50)	7.70 (11.73)	6.90 (10.20)	8.31 (13.16)	11.90 (15.63)	11.00 (13.22)	12.89 (18.74)
集団遊び	31.38 (8.21)	28.07 (17.82)	35.46 (22.98)	24.57 (16.30)	23.20 (16.42)	28.00 (17.93)	30.22 (18.79)	23.70 (17.01)	35.23 (19.18)	38.16 (24.03)	37.30 (17.94)	39.11 (30.58)
他児に話しかける	15.38 (8.21)	15.10 (9.26)	15.69 (6.97)	12.64 (8.99)	11.40 (8.91)	15.75 (9.71)	16.65 (7.83)	15.70 (10.06)	17.39 (5.94)	15.84 (8.02)	18.20 (8.32)	13.22 (7.21)
他児から話しかけられる	6.07 (4.56)	5.67 (3.40)	6.54 (5.65)	5.00 (4.15)	5.40 (4.45)	4.00 (3.65)	7.00 (5.72)	5.70 (3.06)	8.00 (7.11)	5.74 (3.30)	5.90 (2.81)	5.56 (3.36)
対話	16.25 (9.12)	14.70 (8.02)	18.04 (10.11)	12.21 (8.82)	12.90 (9.34)	10.50 (8.35)	16.22 (8.04)	15.60 (8.55)	16.69 (7.70)	19.26 (9.84)	15.60 (6.02)	23.33 (11.91)
向社会的行動	2.07 (3.98)	2.67 (5.26)	1.39 (1.36)	0.93 (1.14)	1.00 (1.25)	0.75 (0.96)	1.61 (1.83)	1.70 (2.41)	1.54 (1.33)	3.47 (6.33)	5.30 (8.37)	1.44 (1.59)
主導的行動	3.68 (4.63)	3.77 (4.67)	3.58 (4.68)	2.14 (1.88)	2.10 (1.91)	2.25 (2.06)	3.65 (4.97)	4.20 (5.81)	3.23 (4.42)	4.84 (5.43)	5.00 (5.27)	4.67 (5.92)
自己主張	3.05 (3.04)	3.20 (2.87)	2.89 (3.28)	3.71 (3.54)	3.00 (3.20)	5.50 (4.20)	3.39 (3.41)	3.60 (3.41)	3.23 (3.54)	2.16 (1.92)	3.00 (2.11)	1.22 (5.92)

Table 4 従来の研究と本研究における社会的相互交渉の型の比率

	2－4歳児 Parten & Newhall (1943)	3－5歳児 Barnes (1971)	3－4歳児 Rubin et al (1976)		2－4歳児 Smith (1978)		5－7歳児 Hertz-Lazarowitz et al (1981)	4－6歳児 本研究[a]	
			Middle class	Lower class	Group 1	Group 2		Time 1	Time 2
何もしていない行動＋傍観者的行動	11.67%	24.00%	17.20%	15.12%	13.43%	14.70%	16.49%	14.91%	15.41%
1人遊び	17.50	26.78	14.96	19.83	25.57	20.30	18.85	18.07	17.83
平行遊び	31.67	23.82	29.07	37.37	23.00	27.00	6.39	11.73	22.62
他児との社会的相互交渉	39.16	25.40	38.77	27.68	37.00	38.00	53.68	49.41	42.03
保母との交渉	—	—	—	—	—	—	1.15	8.33	6.93

(a) 本研究のカテゴリは互いに排他的ではないので，合計は100を越える。

Fig. 1 Time 1における社会的相互交渉の平均値の年齢的変化と性差

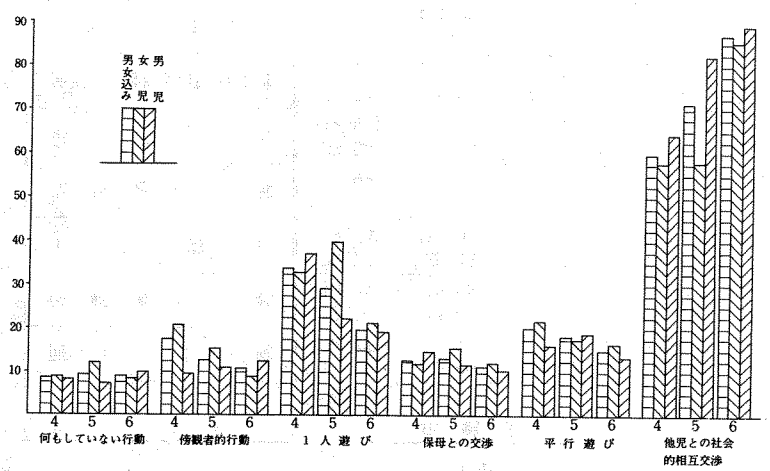
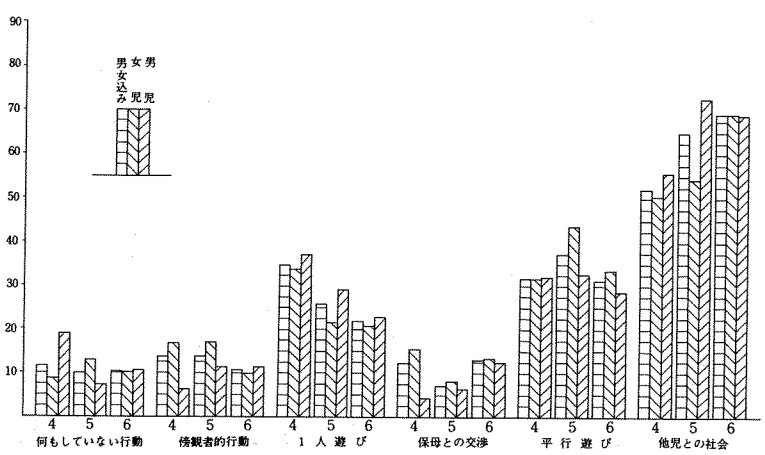


Fig. 2 Time 2における社会的相互交渉の平均値の年齢的変化と性差



社会的相互交渉の時間的変動

本研究では観察を2度行なったが，2度の観察期間で観察された社会的相互交渉のパターンはどの程度変動するであろうか。この問題を検討するために2時点間の各カテゴリの順位相関係数の算出とt-検定とを行なった。

Table 5 に，2時点間の各カテゴリの順位相関係数が示されているが，有意な相関が見られたのは次の通りである：傍観者的行動（r＝.33），保母との交渉（r＝.30），他児との社会的相互交渉（r＝.38）。下位カテゴリについては，他児を攻撃する（r＝.25），けんか（r＝.24），集団遊び（r＝.24），他児に話しかける（r＝.36），他児から話しかけられる（r＝.24），向社会的行動（r＝.33）が有意な相関を示した。

次にt-検定の結果であるが，有意差が認められたのは平行遊び（t＝−5.59，P<0.001）と他児との社会的相互交渉（t＝2.79，P<0.01）である。平行遊びはTime1よりもTime 2で多く，他児との社会的相互交渉は逆にTime 1の方がTime 2よりも多く観察された。下位のカテゴリでは，他児を攻撃する（t＝2.34，P<0.03），他児から攻撃される（t＝2.36，P<0.03），役割遊び（t＝1.74，P<0 09），集団遊び（t＝2.92，P<0.01），対話（t＝2.43，P<0.02）で有意差が見られ，いずれもTime 1でTime 2よりも多く観察された。

社会的相互交渉とテスト得点との関係

社会的相互交渉のパターンは認知的能力とどのように

Table 5　2時点間の各行動カテゴリのSpearman順位相関係数

何もしていない行動	.15
傍観者的行動	.33**
1人遊び	.05
保母との交渉	.30*
平行遊び	−.05
他児との社会的相互交渉	.38**
他児を攻撃する	.25*
他児から攻撃される	.19△
けんか	.24*
役割遊び	−.08
集団遊び	.24*
他児に話しかける	.36**
他児から話しかけられる	.24*
対話	.09
向社会的行動	.33**
主導的行動	.13
自己主張	.20△

N=56
△　P<0.10
*　P<0.05
**　P<0.01（いずれも片側検定）

Table 6　認知テスト得点と社会的相互交渉の型とのPearson相関係数

		菱形模写	人物画完成	言葉の理解	数の保存	かくれんぼ	視点取得	絵の説明
何もしていない行動	T_1							
	T_2			−.24*		−.29*		−.25*
傍観者的行動	T_1	−.29**	−.19	−.21*	−.26*			
	T_2							−.20
1人遊び	T_1		−.24*					−.18
	T_2	−.28**	−.23*	−.30**				
保母との交渉	T_1	−.19				−.20		
	T_2							
平行遊び	T_1							−.21*
	T_2		.18	.28**				.26*
他児との社会的相互交渉	T_1		.23*		.20			.24*
	T_2					.21		

Time 1　N=60，Time 2　N=56
*　P<0.05
**　P<0.02
印のないのは P<0.10（いずれも片側検定）

関係するのだろうか。この問題を検討するために，社会的相互交渉とテスト得点との相関係数を算出した。その結果はTable 6 に示されている。Table 6 に見られるように，Time 1 では傍観者行動が菱形模写テスト，人物画完成テスト，言葉の理解テスト，数の保存テストといずれも負相関を示している。1 人遊びも人物画完成テスト，絵の説明テストと負に相関する。平行遊びは絵の説明テストと負に相関する。他児との社会的相互交渉は人物画完成テスト，数の保存テスト，絵の説明テストといずれも正に相関する。Time 2 では，何もしていない行動が言葉の理解テスト，かくれんぼテスト，絵の説明テストと負に相関する。傍観者的行動も絵の説明テストと負に相関する。1 人遊びは，菱形模写テスト，人物画完成テスト，言葉の理解テストと負相関し，平行遊びは人物画完成テスト，言葉の理解テスト，絵の説明テストと正相関している。他児との社会的相互交渉はかくれんぼテストと正相関する。

因子分析

本研究で観察された社会的相互交渉の各カテゴリは相互にどのように関係しあうのだろうか。そこには潜在的な構造が見られないだろうか。この問題を検討するために，Time 1，2 それぞれについてSPSS（三宅，中野，水野，山本1977）の中のPA 1 法を用いた因子分析を行なった。変数は，何もしていない行動，傍観者的行動，1 人遊び，保母との交渉，平行遊び，他児との社会的相互交渉の11の下位カテゴリ，月齢，被保育年数，菱形模写テスト＋人物画完成テスト＋言葉の理解テスト（この合計点を「認知得点」と呼ぶ），視点取得テスト＋絵の説明テスト（この合計点を「社会的認知得点」と呼ぶ）の20であった。主因子解で固有値が1.0以上であることを基準に因子を選択しバリマックス法による回転を行なったが，選択された因子数はTime 1 で7つ（累積寄与率は68.0%），Time 2 で9つ（累積寄与率は76.6%）であった。Fig. 3～8は，バリマックス回転後の初めの3因子における各変数の負荷量を図示したものである。

第1因子には，Time 1 では役割遊び，集団遊び，向社会的行動が正に，1 人遊びが負に負荷した（Fig. 3）。Time 2 では，役割遊び，集団遊び，対話が正に，平行遊び，他児から攻撃される，1 人遊びが負に負荷した（Fig. 6）。第2因子には，Time 1 では他児に話しかける，主導的行動，自己主張がいずれも正に負荷するが，Fig. 3 に示されるように，第1因子と第2因子とは直交している。又，Time 2 では，認知得点，月齢，向社会的行動，社会的認知得点が正に，1 人遊びは負に負荷した。Time 2 でも第1因子と第2因子とは直交的である（Fig. 6）。第3因子には，Time 1 では被保育年数が正に，何もしていない行動，傍観者的行動が負に負荷した。Fig. 4，5 に示されるように，第1因子，第2因子のいずれとも直交的である。Time 2 では，他児に話しかける，主導的行動が正に負荷し，やはり第1因子，第2因子のいずれとも直交的である（Fig. 7，8）。Time 1 において，月齢，認知得点，社会的認知得点は第5因子に正に負荷している。Time 2 で，何もしていない行動，傍観者的行動は第4因子に負に負荷した。

以上の結果から，2つの時点にほぼ共通して見られる互いに独立な4つの因子を抽出することができる。まず第1の因子は，集団的活動－1 人遊び，平行遊びという次元を表わすものと考えられ，集団的活動が正に，1 人遊び，平行遊びが負に負荷する。第2の因子は，社会的相互交渉への積極性を表わすと考えられ，主導的行動，他児に話しかけるが正に負荷する。第3の因子は，何もせずにいる程度を表わすと考えられ，何もしていない行動，傍観者的行動が負に負荷する。第4の因子は，認知発達の程度を表わすと考えられ，月齢，認知得点，社会的

認知得点が正に負荷する。

Fig. 3　Time 1 における因子分析結果のプロット　第 1 因子×第 2 因子

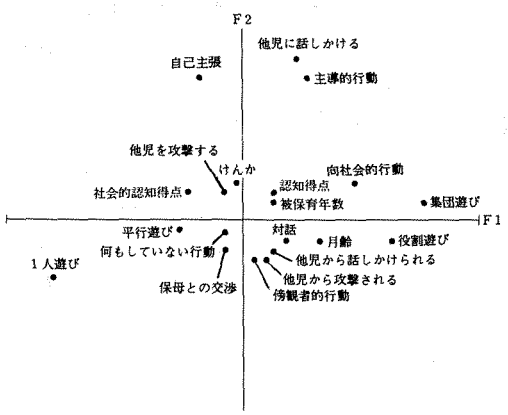


Fig. 4　Time 1 における因子分析結果のプロット：　第 1 因子×第 3 因子

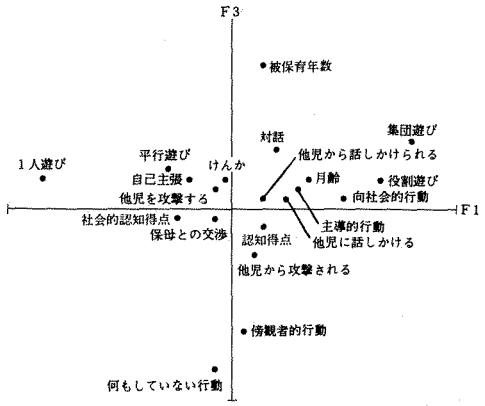


Fig. 5　Time 1 における因子分析結果のプロット：　第 2 因子×第 3 因子

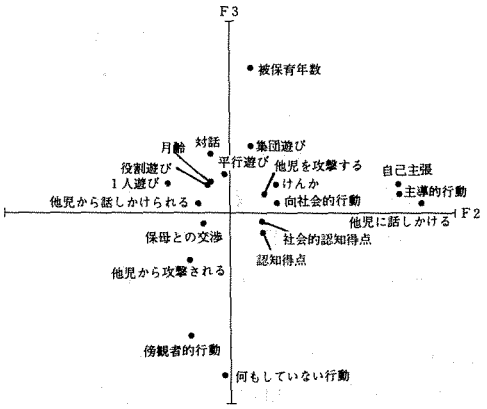


Fig. 6　Time 2 における因子分析結果のプロット：　第 1 因子×第 2 因子

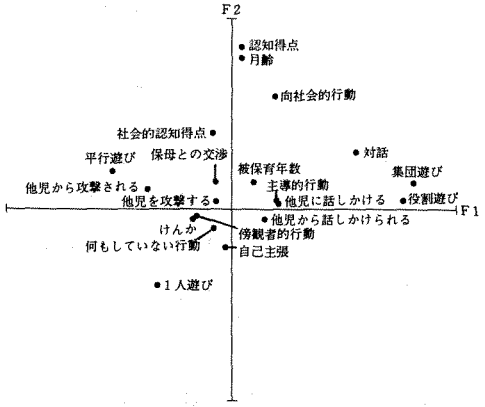


Fig. 7　Time 2 における因子分析結果のプロット：　第 1 因子×第 3 因子

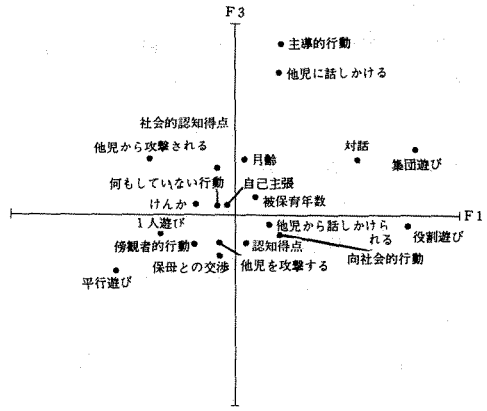
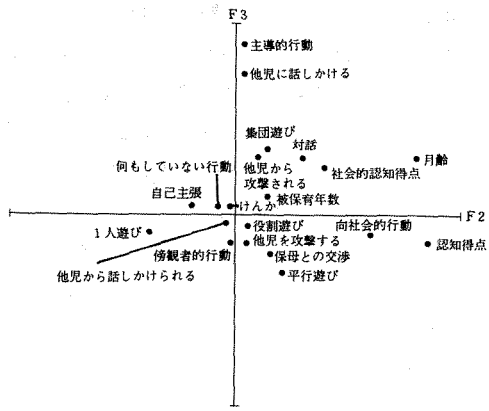


Fig. 8　Time 2 における因子分析結果のプロット：　第 2 因子×第 3 因子



考 察

Hertz-Lazarowitz et al (1981) は，イスラエルの5，7歳児の社会的相互交渉を観察した結果を報告している。彼らによれば，5，7歳児の資料と従来の2－4歳児の資料との大きな違いは，平行遊びが少なく他児との社会的相互交渉が多いという点であった。彼らの資料では，平行遊びは全行動の6.4％（従来の資料ではおよそ30％前後）を占めるのみである。他児との社会的相互交渉は50％を超える（従来の資料では30％前後）ことが示された。一方，1人遊びは19％で従来の資料とほとんど変わらない。これに対して本研究の結果では，他児との社会的相互交渉は42％と49％で，2－4歳児の資料より多いもののHertz-Lazarowitz et alの資料ほど多くはない。平行遊びは12％と22％で，30％程度見られている2－4歳児の資料よりは少ないものの，やはりHertz-Lazarowitz et alの6.4％ほど少なくない。一方，1人遊びは2時点ともに18％で，2－7歳児の資料とほぼ一致する。何もしていない行動，傍観者的行動はあわせておよそ15％で，これも2－7歳児の資料とほぼ一致している。このように，本研究の結果では平行遊びと他児との社会的相互交渉の2カテゴリが2－4歳児と5，7歳児の資料のほぼ中間に相当するだけ観察されていることが示された。従って，従来の結果と本研究の結果とを考えあわせると，平行遊びは年齢とともに減少し，1人遊びはほぼ一定の水準を保ち続け，他児との社会的相互交渉は増加するという社会的行動の発達のパターンを想定することができよう。そしてこれは，1人遊びがオプションであり，平行遊びが社会的に最も未熟な行動形態であるとした最近の見解（Rubin et al 1976; Smith 1978）を支持するもののように思われる。

しかし，これを年齢群別に検討してみると，異なった様相が浮かび上ってくる。即ち，Fig. 1，2に示されるように，2時点ともに1人遊びは年齢とともに減少する傾向を示し，平行遊びは一定の水準を保っている。社会的相互交渉は年齢とともに増加する傾向を示す。これは，年齢とともに平行遊びが減少し1人遊びは一定の水準を保つであろうという最近の見解に基づいた予測とまったく逆の結果である。

又，認知能力との関係では，もし1人遊びがMoore et al (1974) や，Rubin et al (1976) の言うような適応的で課題志向的な活動であるとすれば，それは認知能力と正に相関するであろう（e. g. Jennings 1975）し，もし平行遊びが社会的に最も未熟な活動であるとすれば，それは認知能力と負に相関するであろう（e. g. Rubin; Rubin et al 1976 による）。しかし，認知能力との相関関係も最近の見解に基づくこのような予測を支持していない。すなわち，1人遊びは認知能力と負に相関する傾向を示すし，平行遊びは無相関ないし正に相関する傾向を示す（Table 6 参照）。これらの結果は，本研究で観察した1人遊びと平行遊びの意味がRubin et al (1976) やSmith (1978) の観察したものと異なっていることを示すと思われる。しかし，本研究での1人遊びと平行遊びの定義はParten (Parten & Newhall 1943) に基づいたものであるから，定義上Rubin et al (1976) やSmith (1978) のものと異なっていない筈である。従って，このような違いは単なる定義の違いではなく，そこで展開された活動の内容が異なっていると考えることができよう。残念なことに，本研究では遊びの具体的内容についての記録は行なわれなかったので推測以上のことは言えないが，このような結果は日本という社会に特有なものであるのかもしれない。日本では，かなり幼い時から集団に適応し集団で活動することに対する強化が行なわれる。従って，欧米の文化圏における1人遊びが，いわば個人的活動

であるのに対して，日本ではむしろ，集団に参加できない状態を表わしているのかもしれない。又，平行遊びもParten（Parten & Newhall 1943）が想定するように，うまく相互交渉を持つことはできないにしても，集団的活動に対する指向性は認められるし，又ある程度の相互交渉を持つことも実際可能であるのかもしれない。この点についてBakeman & Brownlee(1980)の見解は示唆的である。彼らは，幼児の社会的相互交渉の系列分析（Sequential analysis）から，平行遊びが子どもの集団的活動の一連の流れの1局面を表わしている可能性を示した。当然のことながら，この見地に立てば平行遊びは社会的に未熟な行動形態であるとは考えられない。むしろ，集団的活動が比較的ルーズに行なわれている場合にはかなり一般的に見られる活動であるかもしれない。とすれば，本研究の結果が示すように，年齢に関係なく一定程度観察され，しかも認知能力とも正に相関する傾向が見られることも説明されよう。

ただし，Rubin et al（1976）やSmith（1978）の結果と本研究の結果との違いは観察方法の違いによるのかもしれない。特に，上記のような見地に立てば，1時的な観察であるか連続的な観察であるかは非常に大きな問題になるだろう。Rubin et al（1976）やSmith（1978）では，一定時間（Rubin et alでは60秒，Smithでは40秒）の活動全体に1つのカテゴリが付与される。それに対して本研究では，20秒ずつ30回連続的に観察を行なっているので，平行遊び→集団的遊び，集団的遊び→平行遊びの移行が同じ場所で連続的に起こることが十分に考えられるし，実際にかなり多く見られている。Rubin et al（1976）やSmith（1978）では，たとえ40～60秒の間に集団的遊びが一時的に平行遊び的に変化しても，全体としては集団的遊びと見なされるであろう。この問題は，更に詳しく検討してみる必要があろう。

次に因子分析の結果について考察する。因子分析の結果は，年齢差の分析や認知能力との相関分析の結果と同様に，1人遊びオプション説を支持するものではなかった。すなわち，1人遊びは集団遊びと同一の因子に負荷し，しかも集団遊びは正の，1人遊びは負の負荷量を示した。この結果は，1人遊びが集団遊びと独立な因子に負荷するとしたRoper & Hinde（1978）の結果と対立するものである。そして，この結果は，1人で遊ぶことと集団で遊ぶこととを同一の次元の両極であるとしたEmmerich（1964，1977）やKohn & Rosman（1972）のモデルと一致するものである。ただし，何もしていない行動，傍観者的行動が独立な因子を形成するという結果は本研究でも支持された。従って，少なくともPartenのカテゴリの一次元性の仮定（Parten & Newhall 1943）は妥当しないと思われる。

ところで，Kohn & Rosman（1972）によれば，子どもの社会的行動の個人差を「興味・参与（Interest-Participation）－無関心・引込み（Apathy-Withdrawal）」という次元で捉えることができる。彼らの結果では，就学前期に「無関心・引込み」傾向の強い子どもは，「興味・参与」傾向の強い子どもに比べて就学後の成績が低い。恐らく，「無関心・引込み」傾向は，ある集団に対するその子どもの適応状態の悪さを示しているのだろう。本研究で観察された1人遊びがその子どもの「無関心・引込み」傾向の表われであるとすれば，1人遊びが認知能力とむしろ負に相関することも理解されるのではないだろうか。ただし，既に述べたように，本研究では1人遊びの内容が記録されていないし，子どもの適応状態も考慮されていない。従って，本研究で観察された1人遊びがKohn & Rosman（1972）の「無関心・引込み」傾向の表われであるとする証拠はない。しかし，それは少なくともMoore et al（1974），Rubin et al（1976）やSmith（1978）の主張する程適応的で課題志向活動ではないという可能性を示唆していると考えられる。

最後に，2時点間における各行動カテゴリの安定性についてであるが，Table 5 に示されるように2時点間の順位相関係数はいずれもそれ程大きなものではない。ただし5％以下の危険率を一応意味のある相関の目安とすれば，傍観者的行動，保母との交渉，他児との社会的相互交渉はある程度の一貫性を示している。そして，1人遊びと平行遊びはほとんど一貫性がない。1人遊びと平行遊びをする傾向がほとんど安定していないという結果は Emmerich (1964) や Roper & Hinde (1978) の結果と食い違っている。一方，因子分析の結果では，2時点間でおよそ似たようなパターンが得られている。

要 約

本研究は，4－6歳児を対象として社会的相互交渉を観察し，認知能力との関係を検討し，そして各行動カテゴリ相互の関係を分析することで，最近再び問題にされるようになった1人遊びと平行遊びの意味を検討することを目的とした。本研究の結果は，Rubin et al (1976) や Smith (1978) によって提出された1人遊びオプション説を支持するものではなかった。むしろそれは，Kohn & Rosman (1972) のモデルの「無関心・引込み」傾向を表わすものと解釈された。すなわちそれは，Moore et al (1974)，Rubin et al (1976)，Smith (1978) の想定するような適応的で課題志向的活動というよりも，集団に参加できずにいるいわばある種の不適応的状態の表われであると解釈された。

又，平行遊びについても，Rubin et al (1976) や Smith (1978) の想定する程社会的に未熟な行動形態ではなく，むしろ Bakeman & Brownlee (1980) の想定するように，集団的遊びの一連の流れの中で見られる1局面であると解釈された。このような結果の違いは，恐らく本研究が連続的に行動を観察記録したのに対し，Rubin et al (1976) や Smith (1978) では，一定時間中の最も優位な行動だけを記録するという方法を用いたことに部分的に依っていると考えられた。

References

Bakeman, R., & Brownlee, J. R. The strategic use of parallel play: A sequential analysis. Child Development, 1980, 51, 873-878.

Barnes, K. E. Preschool play norms: A replication. Developmental Psychology, 1971, 5, 99-103.

Emmerich, W. Continuity and stability in early social development. Child Development, 1964, 35, 311-332.

Emmerich, W. Evaluating alternative models of development: An illustrative study of preschool personal-social behaviors. Child Development, 1977, 48, 1401-1410.

Hertz-Lazarowitz, R., Feitelson, D., Zahavi, S., & Hartup, W. W. Social interaction and social organization of Israeli five- to seven-year-olds. International Journal of Behavioral Development, 1981, 4, 143-155.

Jennings, K. D. People versus object orientation, social behavior, and intellectual abilities in preschool children. Developmental Psychology, 1975, 11, 511-519.

Kohn, M., & Rosman, B. L. Relationship of preschool social-emotional functioning to later intellectual achievement. Developmental Psychology, 1972, 6, 445-452.

三宅一郎・中野嘉弘・水野欽司：山本嘉一郎．SPSS 統計パッケージⅡ解析編，東京：東洋経済新報社，1977.

Moore, N. V., Everton, C. M., & Brophy, J. E. Solitary play: Some functional reconsiderations. Developmental Psychology, 1974, 10, 830-834.

Parten, M., & Newhall, S. M. Social behavior of preschool children. In R. G. Barker, J. S. Kounin, &

H. F. Write (Eds.), Child behavior and development. New-York: McGrow-Hill, 1943.

Roper, R., & Hinde, R. A. Social behavior in a play group: Consistency and complexity. Child Development, 1978, 49, 570-579.

Rubin, K. H., Maioni, T. L., & Hornung, M. Free play behaviors in middle- and lower-class preschoolers: Parten and Piaget revised. Child Development, 1976, 47, 414-419.

Schaefer, E. S. Development of hierachical, configurational models for parent behavior and child behavior. In J. P. Hills (Ed.), Minnesota symposia on child psychology (Vol. 5). Mineapolis: University of Minnesota Press, 1971.

Smilansky, S. The effects of socio dramatic play on disadvantaged children: Preschool children. New York: Wiley, 1968.

Smith, P. K. A longitudinal study of social participation in preschool children: Solitary and parallel play reexamined. Developmental Psychology, 1978, 14, 517-523.

Ujiie, T., & Furuta, Y. Prosocial behavior and its correlates in nursery school children. Annual report of RCCCD 1979-1980, Faculty of Education, Hokkaido University, 1981.

付記）本研究を行なうに際し，快よく御協力して下さった札幌市立青葉保育園の教職員の皆様と子ども達に心から感謝いたします。